

阿波野青畝の句碑巡り

高取町には、昭和を代表する俳人阿波野青畝の句碑が5箇所あります。今日は、紙上でその句碑を巡ってみました。本紙を読んで実際に町内を歩いてみてはいかがでしょう。

虫の灯に 読み昂ぶりぬ 耳し児

たか

こ

青畝の生家の中庭にある句碑

大正6年 18歳作

昭和60年3月に甥の橋本一郎氏が青畝存命中に建立

【解説】

幼い頃よりの耳疾でよく耳が聞こえない。秋虫の音を聞きながら本を読みふけっている「耳しひ児」それは私な

飯にせむ 梅も亭午と なりにけり

てい

こ

夢創館の中庭にある句碑

昭和17年 43歳作

平成12年3月夢創館の中庭に建立

【解説】

日はすでに頭の上にあつて正午になつている証拠だ。なんとなしにひもじい気持ちが催して、飯を食う所がないかと人に聞いて、食事をした。

満山の つぼみのままの 蹤躅かな

つづじ

砂防公園の石畳の庭にある句碑

昭和21年 47歳作

平成11年3月砂防公園に建立

【解説】
これから躑躅の花が、一杯に咲こつとしています。

供 読 眼耳鼻舌身 意無しと

そなえいも

げせ

びぜつしん

い

な

長円寺の中庭にある句碑

昭和20年 46歳作

昭和43年12月に長円寺の住職が建立

【解説】

戦時中のこと、長円寺の仏様に供えてあるさつま芋を住職に頂いた。お腹が減つていて、全身で味わつておいしかった。眼耳鼻舌身とは、般若心経にでてくる「無眼耳鼻舌身意」から引用しています。

葛城の 山 懐に 寝釈迦かな

やまふところ

ねじやか

中央公園の東屋にある句碑

昭和3年 29歳作

平成16年3月に高取中学校から中央公園に移転

【解説】

郷里の高取からは葛城山がよく見える。寝釈迦の図は、実際に葛城山の山腹にある寺の中にあるが、まるで葛城山腹に寝釈迦が抱かれているがごとく思える。

